

後嵯峨院陵ごさざがのみんのみさぎ〔旧地天龍寺方丈の西北にあり、今詳ならず。文永九年二月十七日、龜山の別院藥草院べつゐんやくさうゐんにおいて崩御

し給ふ、聖寿五十三歳〕

龜山院御塔かめやまのみんのみ たふ〔今天龍寺てんりうじの西の山に塚あり、古木森々とし此所地中や、もすれば鳴動す、恐くは此陵なるか。紹運せううん

録ろく曰、嘉元三年九月十五日崩御し給ふ、聖寿五十七歳。増鏡曰、龜山殿かめやまどのの上の山に火葬し、法華堂ほつげだうを立て御骨を納むと云々〕

大井川おほゐがは〔水脈前篇に見へたり、一名葛野川、又西川ともいふ〕

後撰おほゐがは 大井河うかべる舟のかゞり火に小倉をぐらの山は名のみなりけり 業平朝臣

同 水上に紅葉ながれて大井河むらこに見ゆる瀧のしら糸 堀川右大臣

千載 大井河かゞりさし行うかひ舟いくせに夏のを明すらん 俊成

古今著聞集云 亭子院ていしゐんの御時、昌泰元年九月十一日、大井河に行幸有て、紀貫之きのつらゆきのわか和歌の仮名序をかけり。

あはれ我君の御代、長月のこゝぬか、昨日といひて残れる菊見給はん、またくれぬべき秋ををしみ給はんとて、月のかつらのこなた、春の梅津うめづより御舟よそひて、わたしもりをめして、夕月夜ゆづきよ小倉をぐらの山のほとり、行水の大井の河

辺にみゆきし給へば、久方の空にはたなびきける雲もなく、みゆきをさふらひ、ながき泉は底ににこれるちりなく
て、おほん心にぞかなへる。とみことのりして仰せ給ふことばは、秋の水にうかびてながれ来るかとあやまたれ、
秋の山を見れば折にひまなき錦をおもほえ、紅葉のはのあらしに散てもらぬ雨と聞え、菊の花の岸に残れるを空な
る星かとおどろき、霜の鶴川つるかはべ辺にたちて雲のおるかとうたがはれ、夕の猿山さるのかひに啼て人の泪をおとし、たびの
かり雲路にまどひて玉章かとみえ、あそぶかもめ水にすみて人になれたる、入江の松幾世へぬらんといふ事を詠せ
たまふ。われらみじかき心のこのもかのもにまどひ、つたなきことは吹風の空にみだれつ、草のはの露とともに
に泪落、岩浪とともによろこばしき心ぞたちかへる。ことのはのすゑまで残り、今をむかしにくらべて、後のけふ
をきかん人、あまのたくなはくりかへししのぶの草のしのばざらめや。

法輪寺はふりんじ

〔由縁前編に見へたればこゝに略しぬ、地境の画図は景色を書たれば委からず、故に其図を起してこゝに顕
す。抑此地はいにしへより桜花かずくありて、弥生のさかりには都下の騷人こゝに詣し、あるは大堰おほゐの川辺にやすら
ひて酒をすゝめ、渡月橋とげつけうの行人筏を下す春のしがらみ、また秋はあらしの山の紅葉ば、戸灘瀬となせの瀧たき、千鳥ちどりが淵ふち、小督こがうが
塚つた、西行さいぎやう桜やうざくら、轟とろろ橋きはし、まことに美景玲瓏としてながめ足らずといふ事なし〕

法輪はふりんに籠りたる頃、人の間来て帰りなむとするに、

家集

諸ともに聞くだにさびし思ひをけ帰ん宿の峰の松風

兼

好